

2218 離島覚書（鹿児島県諏訪之瀬島）



口之島から諏訪之瀬島を望む

令和4年10月15日

元浦港

前日の23時に鹿児島港を出発したフェリー「としま2」はトカラ列島の口之島、中之島を経て、7時40分に諏訪之瀬島の元浦港に着いた。フェリーは定刻よりも25分ほど遅れた。鹿児島港から諏訪之瀬島までは約250km離れており、鹿児島からの所要時間は8時間40分であった。

諏訪之瀬島には元浦港と切石港の2つの港がある。この日は風の関係で元浦港に入った。もう一つの切石港は御岳^{おたけ}の噴火で火山灰が流入し水深が浅くなっているため、満潮時前後でないと利用できないようだ。

フェリーから下船したのは私と乗用車の2人だけだった。乗用車の方は東京から釣りをしながら諏訪之瀬島まで来た高齢者（元左官工）で、偶然同じ宿だった。

元浦港には「民宿ヤマキ」の夫婦が迎えに来ていた。ご主人の山木保さんが到着した荷物を受け取ってから、助手席に乗せてもらって民宿へ向かう。諏訪之瀬島の集落は急な坂を登ったならかな中腹に形成されている。山木さんは途中、村営住宅や兄宅、従兄の家などに立ち寄り、荷物を届けた。村営住宅は敷地内に1戸建て3棟、2戸建て2棟、独身寮（4室）1棟が建っている。

「民宿ヤマキ」は集落のほぼ真ん中にある。玄関に入って左の部屋に案内された。

諏訪之瀬島の面積は27.6km²で、トカラ列島の中では中之島に次いで大きい。楕円形をした島なので、周囲は24.5kmと短い。島の中央には御岳（標高796m）がそびえる。御岳は活火山でつい最近も爆発し、噴煙をあげていた。このため半径1km圏内は立ち入りが禁止されている。したがって島を見て歩けるのは島の南部周辺だけで、島のおよそ4/5は道路もなく立ち入ることはできない。

早速、民宿の軽自動車を借りて、島内を走ることにする。ところが借りた車はマニュアル車であった。久しぶりに乗るのでちょっと面食らう。事故を起こしては大変なので注意深く走ることにした。

集落から急坂を下り、フェリーが着いた元浦港に行く。沖合に平島がよく見えた。フェリーの発着場所の手前が漁港区域になっていて、漁船が1隻だけ係留されていた。また漁港から登る坂道の途中で陸揚げされた漁船が1隻置かれている。



元浦港（左）、港の付け根に整備された漁港区域（右）

ヤマハリゾートと諏訪之瀬空港

反対側の急坂を登り、滑走路の地下につくられたトンネルを抜けると諏訪之瀬空港に出た。正式な空港ではないので、場外離着陸場と呼ばれている。

トカラ列島の7つの有人島のなかで飛行場があるのは諏訪之瀬島だけである。この飛行場はヤマハ(株)がリゾート開発した時の置き土産であった。

ヤマハ(株)は1972(昭和47)年に諏訪之瀬島にリゾート開発することを決定。空路によるアクセスを確保するため、私設の飛行場を整備し、1975(昭和50)年8月に供用を開始した。鹿児島空港と諏訪之瀬島との間をアイランダー(8人乗り)とトライアンダー(16人乗り)というプロペラ機で結んだのである。

1977(昭和52)年にはヤマハリゾートの旅荘「吐火羅」をオープンする。ここには、支配人とフロント2名、和洋の料理長が各1名、レジヤ担当が3~4名、農園・食料担当が2名、これにウエーターや裏方さんが4名、合計14~15名のスタッフがいた。じつは「民宿ヤマキ」のご主人の山木保さんは大学を卒業後、地元出身者として農園・食料担当として働いていたのである。ヤマハ(株)の川上源一社長が島の食材にこだわっていたからだ。

しかし旅荘はオープン4年後の1981(昭和56)年秋まで営業し、客の少ない冬季は閉鎖することになり、その後撤退した。ヤマハ(株)の諏訪之瀬島のリゾート事業は結局失敗した。川上社長は、日本も週休2日制が定着すれば余暇需要が増え、リゾート事業は市場性があると踏んでいたが、同社による離島のリゾート開発は硫黄島(鹿児島県)、黒島(沖縄県)も挫折し、小浜島(沖縄県)が残るのみである。結局日本にリゾート事業は定着しなかった。

ちなみに山木さんは1982(昭和57)年に三重県にある「合歓の郷」に転勤になり、島を去ったが、諏訪之瀬島の事業再開が断念されたため1年間働いた後、諏訪之瀬島に戻り、民宿業を始めることになる。ヤマハ(株)の私設飛行場は十島村管理下に置かれ、場外着陸場とし

てその後も残り、緊急時やヘリポートとしても活用されてきた。

滑走路は約700mある。立ち入りは禁止されておらず、自由に走れるので、久しぶりのマニュアル車に慣れるため、滑走路で車の練習をした。車を走らせていると、滑走路の草むらを3組のヤギが走っていった。雄と雌のペアで子連れである。トカラヤギは「家族」として行動しているのだろうか。後に平島でみたトカラヤギは黒と白の斑だったが、諏訪之瀬島のヤギは3組とも白だった。警戒心が強く明らかに野生と思われる。

この飛行場を利用して、新日本航空㈱が今年の10月から運航を開始することになっている。乗客定員は3名の小さな飛行機だ。毎週、火曜日と金曜日に運航され、鹿児島空港を9時30分に出発して、1時間30分を要して、11時に諏訪之瀬島に着く。11時30分に鹿児島空港に戻る運航となっている。料金は片道6万円、島民は10,800円に割引になる。このため空港の入口に待合所が整備されていた。ただし、トイレがあるだけで建物のなかはガラندوقであった。

空港の周囲はリュウキュウチクの竹林が取り囲み、近くに九州電力のディーゼル発電所が置かれている。



諏訪之瀬島場外着陸場（左）、同着陸場に設置された待合室（右）

切石港

飛行場から島の東岸に向かって坂を下りていくと、切石港に出た。

切石港は島の東側にあるので風向きによって元浦港と使い分けているが、現在は御岳からの火山灰で港の水深が浅くなっていることから、風向きが切石港に有利だったとしても満潮時でないと利用できないことはすでに述べた。

フェリーの発着場の奥に漁港区域がある。しかし風がきわめて強かったためか、1隻も係留されていなかった。漁船は斜路に1隻と道路沿いに7隻ほど陸揚げされていた。ただし実際に使われている漁船かどうかはわからない。

山側にブルーに塗られた比較的大きな製氷施設が建つ。漁港区域にある製氷施設は壊れていたもので、この代替として建てられたものであろう。製氷施設の前には魚を運搬するための大きなクーラーボックスが5つ並んでいた。南風丸と書かれたものが3個、九州中央魚市と十島村漁協と書かれたものがそれぞれ1個である。

漁港区域の先の海岸に「乙姫の洞窟」と呼ばれる岩の間に自然にできた空洞がある。石が転がる海岸を歩いて、洞窟まで足を伸ばした。石の間には多数の漂着ゴミが溜まっている。

メインは中国大陸が起源と思われるペットボトル類が圧倒的に多いが、南方の島からもたらされたであろう椰子の実も見つかった。岩の窪みには黒い色をした火山灰が積もっていた。



切石港のフェリー接岸岸壁（左）、漁港区域の斜路と建物（右）

漁業

諏訪之瀬島の漁業者は十島村漁協に属している。同島の正組合員は3人、准組合員は8人である。島の専業漁師は民宿浜原荘の伊東典親さんという方で、1985（昭和60）年から漁業に取り組んでいたベテランである。過去10年間の水揚額が上位に位置し、十島村の有力な漁業者だ。「民宿ヤマキ」の山木保さんも民宿、牛飼、漁業を兼業しており、准組合員になっていて、宿で提供する水産物は自ら漁獲している。

諏訪之瀬島で営まれている漁業は、深海一本釣り、中層一本釣り、曳縄、トビウオ刺網、潜水などである。深海一本釣りではチビキ、中層一本釣りではアオダイ、ウメイロ、曳縄ではカツオ、キハダ、サワラなどが漁獲対象だ。トビウオの刺網は産卵で回遊してくる5～7月が漁期になる。イセエビは網ではなく、潜水で漁獲する。

元浦港の奥の漁船船溜まりには南風丸と書かれた漁船が1隻だけ係留されていたが、これが伊東さんの漁船。また、陸上にも1隻の漁船が置かれていたが、こちらは山木保さんの漁船であった。



伊東典親の漁船・南風丸Ⅱ（左）、陸揚げされていた山木保さんの漁船・絵里香（右）

2021年の諏訪之瀬島の水産物出荷量は約6.2トンで、中之島に次いで多い。漁獲した魚類はクーラーに入れて（上述した切石港に置かれていたもの）氷蔵し、フェリーに乗せて鹿

児島市の九州中央魚市(株)に出荷される。

牛飼い

切石港から集落に戻る。集落の入口付近にキャンプ場があった。広場とテントを張るウッドデッキ、炊事場、トイレなどが整備されている。ただし、あまり利用されている雰囲気はない。

キャンプ場の前には「民宿御岳」があった。この民宿のご主人は森さんといって中之島の出身で、山本さんとは従兄の関係にある。ちなみに諏訪之瀬島には民宿御岳と民宿ヤマキの他に「民宿浜原荘」の3つの宿泊施設がある。何れも在来の島民が経営している。

集落を抜けて坂道を登っていくと親牛に餌を与えている男性がいた。60歳代と思われる男性で、釣り好きが高じて中之島から移住してきたIターン者だった。諏訪之瀬島の畜産組合に入っている人は12人で、彼のようなIターン者は2人だという。島の牛飼いは後述するヒッピーとして1970年代にやってきた人が4人おり、残りの6人が山木さんを含めた在来島民ということになる。2020年の飼養雌牛は100頭、子牛の出荷頭数は50頭であった。

十島村ではU・Iターンを促すため、新規に牛を飼う人に対して雌牛を預託する事業を実施している。彼が飼っている4頭はこの制度で預かっている牛のようだ。

放牧地の飼料は竹であるが、諏訪之瀬島では火山灰が降下して竹の葉に付着するため、この点が他の島に較べてハンディキャップになっている。子牛には輸入飼料を食べさせるので円安の進行によって価格が1.5倍ほどになっているらしい。諏訪之瀬島では農協が飼料を斡旋しているが、他の島では農協以外のルートで仕入れているとのことだ。諏訪之瀬島を含め十島村の最も重要な産業は肉用牛の繁殖であり、肥育は行われていない。

ここからさらに登ると、御岳、根上岳の下に広い放牧地が広がり、黒牛がリュウクウチク(笹の仲間)を食んでいた。トカラ列島や三島村の島々に圧倒的に優占する植物でこれが放牧地の牛の餌となっている。常に食圧に晒されているから草丈は50cmほどで、太い竹には成長できない。もともと島の特産品である大名竹はこのリュウキュウチクであるが、牛に食べられなければ、筍が採れるほどの太さになる。

さらに放牧地の中を進むと、青年が軽トラックに輸入した牧草の束を積み、放牧地にやってきたところだった。彼もやはり5年前に鹿児島市内からIターンしたとのこと、以前は口之島に住んでいたこともあるらしい。この輸入飼料はカナダ産だが、シーズンにより輸入先は変わるようだ。現在、親牛を15頭飼養しており、毎年1頭ずつ増やしているという。これから牛舎を自力で建ててらしく、土台のコンクリートがすでに張られていた。彼は現在、村営住宅に住んでいる。

ナベタオという場所が日本の山桜の南限で、山桜の巨木が生育しているというので見に行くことにした。林道ナベタオ線を登る。曲がりくねった山道を進んだが、最後はリュウキュウチクが道路まで倒れ込み、危険な状態になったことから、最終地点までは行けず、途中で引き返した。

諏訪之瀬島にはナベタオに登る道を挟んで東西に2つの放牧場がある。島民全体の共有地で牛飼い農家が放牧している。東側の放牧場には大きな牛舎があり、子牛がたくさん収容されていた。ここから下がったところに、山本保さんの牛舎がある。

山本保さんは生産母牛を16頭飼養している。この島では規模が大きい。雌牛は一生に12～13頭の子牛を生む。その後、経産牛として処分される。人工授精なので生産頭数は少ないそうだ(受精の確率が低いため)。年間の牛の出荷量は10頭ほどである。現在のセリの相場は、去勢オス牛で50～60万円、雌牛で30～40万円という。



放牧場でリュウキュウチクを食む牛(左)、牛舎で輸入飼料を食む牛(右)

噴煙

諏訪之瀬島の中央にそびえる御岳(796m)は有史以来、噴火を繰り返す典型的な活火山である。1813(文化13)年の大噴火では島民全員が島外に脱出し、1883(明治6)年までの約70年間、無人島になっていた。

今世紀に入ってから毎年のように噴火を繰り返している。2021年6月には噴火警戒レベルが2(火口周辺規制)から3(入山規制)に引き上げられている。このため島の北側4/5ほどは人の立ち入りが禁止され、島の南端の集落周辺しか見て歩けない。

訪問した時も桜島のように活発に噴煙を上げており、持参したメモ用のノートは灰でざらつくほどだった。またいたるところに黒い火山灰が薄く堆積していた。このように活動が活発な火山であることから、島の所々の道路脇には万が一のためにコンクリート製の避難壕が用意されている。



登山道入り口に立てられた立入禁止の看板(左)、道路脇に設けられた避難壕(右)

藤井富傳

山から降りると、山本保さんの牛舎の近くに八幡神社があった。コンクリート製の鳥居を

くぐり、階段を登った先にあるもう一つの木製の鳥居を抜けると、普通の家のような社殿が置かれている。この神社は島の各所に分散していた乙姫様、若宮様、若稚児様や先祖を代々祀っていた場所を合祀したものである。人口が減った今日、島内に分散していたのでは管理が大変になったためだろう。

神社から坂をさらに下った場所から山の中に入ると、「藤井富傳翁之墓」と書かれた墓石が置かれている。1904（明治 37）年 1 月の命日が刻まれ、享年 78 歳であった。墓の脇には翁の功績をたたえる表彰状が掲示されていた。1962（昭和 37）年に十島村村長が建てたものである。

十島村史によると、諏訪之瀬島は 1813（文化 10）年の御岳の大噴火で、島民全員が中之島、平島、臥蛇島、口之島に分散移住し、無人島になった。噴火以前は、溪谷を隔てて東南方向一帯と元浦に至る地に東村と西村の 2 つの集落があったらしい。世帯数は 100 戸以上、人口も 400～500 人に及んだと推定されている。

いったん無人島になった土地に再入植したのが奄美大島笠利出身の藤井富傳であった。藤井は 1827（文政 10）年に奄美大島の笠利町で生まれ、1884（明治 17）年に無人島になっていた諏訪之瀬島に開拓民として入植した。墓石脇の表彰状には奄美大島より池山政ほか 26 名を率いて渡島したと書かれていたが、十島村史には、山木太蔵さん（民宿ヤマキの祖父）の話として、最初の入植者は 18 人で、藤井姓の他に、池山、中政、仲吉、泉（園山氏の祖）、本田、坂元であったと書かれてある。

諏訪之瀬島は約 70 年ぶりに有人島となり、現在に至っているわけだ。今日、諏訪之瀬島があるのはまさに藤井富傳のおかげなのである。入植者は焼畑で粟を作り、火山灰で覆われた土地を畑に開墾し、サトウキビ、トン（カライモ）、麦を作って食料を自給した。水田はなかったが、その後、畑で陸稲を作っていたそうだ。



八幡神社の社殿（左）、藤井富傳の墓（右）

民宿ヤマキ

正午を過ぎたのでいったん民宿に戻る。島には食堂も売店もないので、昼食を食べる場所がない。したがってどの民宿も 1 泊 3 食付きなのだ。昼食はスパゲティナポリタンにスープが付いた。教員宿舎の建設工事に来ている工事関係者と一緒だった。

ご主人の山木保さん（69 歳）の先祖は奄美大島から来た開拓民だから、根っからの地元民である。上述したとおり大学を卒業後、ヤマハ(株)に就職し、諏訪之瀬島に帰った。おそら

くりゾート開発による島の発展に期待したのだろう。しかしながらリゾート開発は失敗し、やむなく民宿経営に活路を見出した。

もともと島には宿泊施設がなく、島の各家が交代で来訪者を泊めていたそうだが、島に人がいなくなり、高齢化が進むとともに専門に泊めるところが必要になっただけ。妹を呼んで民宿を始め、父親が牛を飼っていたことから畜産業も継承、さらに漁船を購入して漁業にも参入した。また、1984（昭和 59）年 6 月から 2004（平成 16）年 6 月までの 20 年間、十島村の村会議員を務めており、功労者表彰を受けている。

息子はアメリカに留学中の大学生であり、島に戻って民宿を継ぐことになるのか、まだわからないという。

ヒッピー

民宿の本棚に加藤賢秀さんが書かれた「地湧の涙」（2019 年、南方新社）という図書が置かれていた。牛飼いである自身の体験に基づく私小説である。

彼は 1945（昭和 20）年生まれで、都立小山台高校、横浜市大を卒業後、世界を放浪。1971（昭和 46）年に諏訪之瀬島のバンヤン・アシュラム（ガジュマル樹下の修行場）に 1 年間滞在する。その後世界 54 ヶ国を巡った後、諏訪之瀬島に定住した。30 歳の時であった。バンヤン・アシュラムは自然の中での瞑想と自給自足の生活を求める共同体で、外国人を含む 10 数人が集団生活を送っていた。いわゆるヒッピーである。当時、加藤さんのように世界を放浪する日本の若者は多かったのだ。

われわれの世代にとって「ヒッピー」は懐かしい響きをもたらす。アメリカのベトナム反戦運動や公民権運動などの反体制運動が盛んであった 1960 年代、近代文明に対するアンチテーゼとして自然回帰をめざした若者たちをヒッピーと呼んだ。この動きは日本にも波及し、1960 年代の学生運動にも少なからず影響を与えた。しかし彼らは党派性を持たず、政治勢力としても結集しなかったため、自然に消滅することになる。

日本におけるヒッピーの拠点がこの諏訪之瀬島に置かれていたことは今回の島旅で初めて知った。ゲーリー・スナイダー（詩人）なども諏訪之瀬島にやって来て聖地として宣伝したため、世界のヒッピーの憧れともなったようだ。そして彼らは上述したヤマハによるリゾート開発に対し反対運動を展開する。

当時、ヒッピーとしてやってきて、その後、島を去った人も多いが、今でもこの島に残る人々がいる。今回、小説を書いた加藤賢秀さんの他に長沢哲雄、秋庭健二、高山英夫の 4 氏である。当初、集団生活をしてきたが、その後ヒッピーどうして結婚し、家庭を持ち、今は分散して住んでいる。

つまり諏訪之瀬島の島民構成は、①奄美大島からの開拓民を先祖とする在来島民（Uターンを含む）と、②1970 年代にやってきたヒッピー、そして③近年の I ターン者の 3 様に分かれる。

山海留学

昼食後、加藤さんの著書をパラパラとめくり、13 時 20 分ごろに民宿を出て、徒歩で集落内を巡ることにする。民宿の上の集落には診療所、郵便局、村役場の出張所、村営住宅、集

会所などが置かれている。一番上段に山海留学生の寮となっている「諏訪之瀬島荘」があった。ここには山海留学生5人が住んでいる。

寮の管理人は長谷川さんといい1965（昭和40）年生まれの57歳。長谷川さんは口之島に8年住み、諏訪之瀬島にきて3年目になる。家族と一緒にこの寮に住んでいる。学校給食がある時は給食を利用するが、それ以外の食事は毎日作らなければならない。

「諏訪之瀬島荘」から坂を下り、朝方、山木保さんが荷物を届けに行った広い敷地の家に行くと、先ほど子ヤギを連れて散歩していたおばあさんが椅子に腰かけていた。おばあさんは中之島に住んでいたが、ご主人が釣り好きなことから中之島から諏訪之瀬島に移住してきた。その後、ご主人が亡くなったため、現在は単身で民宿ヤマキの近くに住んでいる。山木保さんとは従兄の関係だという。

この家には山木保さんの兄（廣美）（77歳、長いこと鹿児島県の教員をやり、平成16年9月に諏訪之瀬島に戻る。後述する台風の土砂崩れの時は悪石島で教師をしていた）が住む。家の中から小学生が出てきた。この小学生は横浜市の鶴見区から来たという。廣美さんの家には、小4、小6の男の兄弟ともう1人の、合わせて3人の子供がおり、里親になっているようだ。

つまり、諏訪之瀬島には「諏訪之瀬島荘」に5人、山木廣美さんのところに3人、合わせて8人の山海留學生がいることになる。



山海留學生諏訪之瀬島荘（左）、山海留學の子供たち（右）

諏訪之瀬小中学校

15時に諏訪之瀬小中学校を訪問すると、土曜日にもかかわらず、先生がいた。教頭先生らしき人に来校の主旨を伝えると、ちょうど校長が来ているとのことで紹介していただいた。校長室の隣の会議室で、スキンヘッドの校長先生からひととおり小中学校の概要を聞いた。もともと村立平小中学校の分校であったが、2016（平成28）年に独立して、村立諏訪之瀬小中学校になったとのことで、校長先生は今年の4月に赴任した3代目とのことだ。

この学校は小中一貫校ではなく、小中併設校という位置づけだという。児童は小1：1人、小2：1人、小3：2人、小4：2人、小5：2人、小6：1人の9人、生徒は中1：2人、中2：3人、中3：2人の7人の、合計16人である。このうち島外からやってきた山海留學生が上述した通り8人なので、半分を占めていることになる。

十島村の各島では山海留學生を受け入れているが、7つの島の中では最も多い。山海留學

生はいじめにあったり、学校になじめなかった子が多いそうだが、島に來ると毎日通学するようになり不登校は改善するそうだ。学校は少人数でしっかり面倒をみるし、島全体で島民が温かく迎え入れてくれるので、豊かな自然の中で様々な体験を通じて元気を取り戻す。

教職員は、校長、教頭の管理職と、小学校の教諭が3人、中学校の教諭が4人で、養護教員とALT（ニュージーランド人）を合わせると11人である。小学校は2学年ずつの複式学級である。この他に給食担当が1人、非常勤の給食補助が2人である。給食は子どもと先生の分も作る。パンも焼いており、非常に美味しいという。

教職員は、教員住宅、村営住宅と民間の借り上げ住宅に入っている。教員住宅が足りないため、現在、建設中とのことで、道路を挟んだ反対側に中学生教員用の住宅が、出張所を登った集落の外れに小学生教員用の住宅が建設中であった。



村立諏訪之瀬小中学校の校舎（左）、校舎の廊下（右）

御三家

民宿の近くで20歳代と思われる若い女性に会った。最近、島に戻ったようだ。園山さんといい、もとは泉という姓で、先祖は奄美大島の笠利の出身だという。この島に明治になって奄美大島から移住した者を先祖とする家のうち、現在も残っているのは山木家（民宿ヤマキ）、伊東家（民宿浜原荘）、そして園山家の3家だという。彼女の父親は九州電力の発電所に勤めながら、牛を飼い、漁業も営む複合経営である。山木家は牛飼い、漁業、民宿の複合経営で、議員もしていた。民宿ヤマキの前にある伊東家は民宿と漁業を兼業している。

この3家の墓地が集落の下にあると聞いて、道順を教えてもらった。小中学校前の坂を下り、八幡神社の方へ右折し、橋を渡った先を左に入った海が眺望できる場所に3つの墓が並んでいた。たしかにこの墓地には山木、伊東、園山の3家の墓しかなかった。

奄美大島からは藤井富傳に連れられて少なくとも18戸が諏訪之瀬島に移住しているが、この138年の間に開拓民を祖先にもつ家の多くが諏訪之瀬島を去ったことになる。

彼女は、八幡神社のあるところに以前集落があり土砂崩れで埋まってしまったこと、お地蔵さんのこと、この近くに村の出張所や診療所が置かれていたことなどの貴重な情報を話してくれた。

17時ごろ民宿に戻り、風呂に入る。民宿に「十島村誌」が置かれていたので読む。夕食はギンガメアジの刺身、トビウオの干物、鶏の唐揚げ、冷奴であった。昼食で一緒だった工事関係者と、一緒のフェリーで来た東京の釣り人と、3人で夕食を食べた。釣り人は諏訪之瀬

島に長期逗留し、毎日、釣三昧で過ごすらしい。玄関には大量の餌が用意されていた。



開拓家3基の墓石が並ぶ墓地（左）、園山家の墓（右）

令和4年10月16日

土砂崩れ

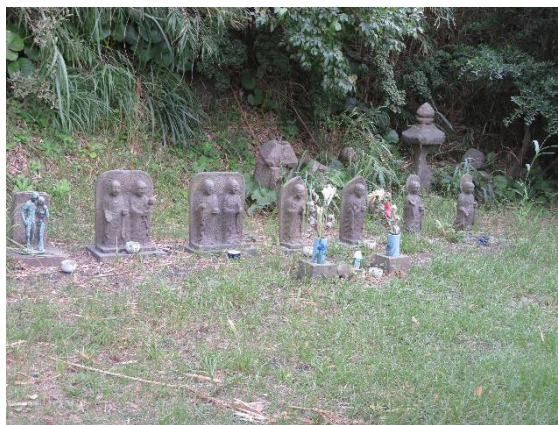
諏訪之瀬島の集落はもともと2つに分かれていた。八幡神社や藤井富傳の墓のあるあたりにあったのが元村、現在の集落が真向^{まっこう}である。

山木さんが福岡の大学で学び、生家に帰ってきたのは1976（昭和51）年9月のことで、当時彼は22歳だった。帰ったばかりの時に台風17号が諏訪之瀬島を襲い、3日間にわたって2,000mmと推定される驚異的な量の雨が降った。この短期間の降雨によって地盤が緩み、集落を飲み込む土砂崩れが発生したのである。

当時、元村には山木さん宅を含め6戸が住んでいた。20時に第1回目の土砂崩れが発生、ヤマハのリゾート開発の仕事で島に滞在していた住友建設の職員2人が住んでいたプレハブ住宅が上流の上地さん宅とともに埋まった。2人は屋根か壁を破って脱出し（夢中だったのでどこから脱出したのかわからなかったとのこと）、山木さん宅に助けを求めてきたそうだ。山木さんの家に生き埋めにならなかった人はいったん集まり、上述した墓の方に避難した。

この土砂崩れで海底ケーブルの3回線が不通となり外部と連絡がとれなくなり、陸の孤島と化した。ヤマハの飛行場があったので、周波数を少し変更して職員がSOSを発信した。違法行為であるが超法規的措置で、幸い上空を飛んでいたキャセイ航空の飛行機が電波をキャッチし、JALに連絡、諏訪之瀬島で緊急事態が発生していることが外部に伝わったという。

この土砂崩れで藤江さん夫妻と上地さん夫妻、大島紬を教えに来ていた人の5人が生き埋めになり、出産したばかりの赤子も死亡した。元浦港から登った高台に地藏様が置かれているが、この土砂災害の犠牲者を祀ったものだという。その後、4軒分の仮設住宅が建てられ、土砂崩れが発生した集落は放棄された。



土砂崩れで亡くなった人を悼む地藏様

集落

昭和 51 年 9 月の土砂崩れの後、諏訪之瀬島の集落は真向地区に集約され、1 島 1 集落となった。この集落の中心部あたりに旧十島村役場の出張所、診療所の建物が残っているが、現在は集落上部に移転し、新しい集落が形成されつつある。この一角には出張所と診療所の他に、郵便局、公民館、村営住宅、山海留学生の寮などがかたまっている。町の中心はこちらに移ったともいえる。そして新しい小学校の教員住宅の建設も進められていた。

フェリーの切符が 8 時から出張所で発売されるので、朝食後、歩いて出張所に行く。村営住宅を含めて新しい建物の屋根はカラーベストになっているが、古い家は屋根の下地材のルーフィングがむき出しになり、その上に塗装している屋根が多い。ルーフィングは軽くて安いことが普及した理由らしい。集落の中には廃屋も目立つ。高齢化した親は子供が本土側に連れて行って、空き家になった家は朽ち果てたのだろう。

出張所で現在の人口と世帯数を確認した。人口は 78 人、世帯数は 38 戸である。このうち平成に入ってから I ターン世帯は 7 戸、U ターン世帯は 5 戸とのことであった。これに先生の世帯数が 11 戸、ヒッピーの世帯が 4 戸、地域おこし協力隊員で子育て施設で働く人、看護師 2 人、役場の出張所の職員などがいるので、在来島民は過半数を下回っていることになる。



新しく整備された出張所と郵便局（左）、村営住宅（右）

フェリー「としま 2」は定刻よりもかなり遅れて到着した。修学旅行にでかける中学生一行（7 人）が一緒に乗り込んだ。トカラ列島の各島の中学生（1～3 年生まで）が一堂に会して鹿児島県内へ修学旅行に向かった。総勢 40 人余とのこと。この修学旅行は 3 年に 1 回の頻度で実施される。前日、お話を聞いた校長と教頭先生も一緒になった。

フェリーは 9 時 57 分に出発し、次の訪問地・口之島に向かった。

【文献】

十島村誌編集委員会編（1995）：十島村誌. 十島村.

斉藤潤（2010）：諏訪之瀬島の人と暮らし，しま、日本離島センター、Vol. 56-2. 68-85.